

コールリッジのロマン主義運動

高瀬 彰典

(1998年10月20日受理)

Coleridge's Romantic Movement

Akinori TAKASE

キーワード：啓蒙思想，フランス革命，産業革命，理性

Key words : the Enlightenment, the French Revolution, the Industrial Revolution, Reason

(1)

18世紀末から19世紀の中頃に至るロマン主義運動は、文学や思想史上に大きな影響を及ぼした歴史的な重大現象であり、人類の精神史において注目すべきものである。ロマン主義は単に文学上の主義主張だけでなく、人間観や世界観の革新を意味し、哲学、宗教、科学から、政治経済等の社会全体の状況にも及ぶに至った。ロマン主義運動は人間の思想と感情という精神を構成する心理的態度の源泉に対する歴史的な一大隆起であった。文学や社会思想の諸相は合理と不条理の二大潮流の相克と和解の歴史から生まれるが、1800年前後に絶頂を極めたロマン主義運動は、非合理主義的傾向を顕著に示し、後の象徴主義や芸術至上主義、神秘主義等の先駆となった。ロマン主義はプラトンの哲学を源泉とし、さらにプロティノスの新プラトン主義に思想的基盤を得て、古典主義と対峙する価値観を構成するという独自の発展を遂げた。

古典主義は感覚的外界との密接な関係の所産であり、外界を人間と緊密な関係を持つものとした。しかし、プラトンは感覚的外界や悟性的理解に現れるものは真実でないとし、イデアの世界こそ真理の世界だと主張した。プロティノスはさらにイデアの世界を純粹精神の世界として把握し、感覚的外界の現象は精神にのみ存在理由を持つと考え

て、プラトンの世界観をもっと精神化してキリスト教的精神を反映するに至ったが、プロティノスは伝統的キリスト教徒ではなかったので、中世的神学と新プラトン主義との間に距離が生じた。しかし、南欧とは隔絶の厳しい自然界を生き抜いたゲルマン民族にとっては、感覚的外界を拒否して精神世界を構築する新プラトン主義が自然に受け入れられ、新プラトン主義と融合したキリスト教が彼等の信仰となったのである。

1700年頃にプロティノスの哲学はシャフツベリーによって再評価されて、ブルーノからプラトンへの系譜と連関が確立された。シャフツベリーの思想は審美的特質を持ち、宗教的感情において新プラトン主義的思考を深めた。このような思想や感情は、主知主義的で現実的なギリシア思想に対立する反対勢力の勃興であり、アポロ的思想に対峙するディオニソスの思想の主張であった。さらに18世紀の時代精神であった啓蒙思想への反抗ともなったこの運動は、ロマン主義思想の先駆として、ギリシア精神の復活ばかりではなくプロティノスの哲学をゲーテやシラーなどのドイツ古典主義に導入させることになった。反主知的な理念が古典主義によって否定されたわけではなかったが、ゲーテやシラーは感覚的外界の現象を拒否して精神のみを肯定するのではなかったから、プロティノスの哲学がさらに受容されて芸術の形態や形而上的

思想として具現化していくのがロマン主義運動であったと言えるのである。

ロマン主義思想の歴史的系譜は、その反主知的で反現実的な諸相における本質的価値や特徴に注目しながら、時代の制約や様々な作家や詩人の思想と感情を詳細に検討して正當に評価し得るものである。1789年に起ったフランス革命は、ヨーロッパの知識層に大きな衝撃をあたえ、詩人や思想家達はそれぞれの個性や立場から反応を示している。ゲーテやシラーもフランス革命から深い影響を受けたし、ロマン主義運動もフランス革命とその後の政治や経済の社会状況を考察しなければその本質を把握できないのである。

時代の精神に注意をはらう者にとって、大衆の不满の原因を解明し、持てる者と持たぬ者との間の失なわれた信頼を取りもどすために、その障害を打破し改革することが必要であった。フランス革命は自由への熱情によって搾取された者たちを鼓舞し、正義に反する重圧への反抗であった。領主は農民に残忍な暴君であることが多く、平民に加えた暴虐は想像を絶するもので、自分は悦楽に耽って、平民を苦しめたのである。司教や貴族も領主と同じく平民を軽んじ搾取していた。全ての官位は世襲制で貴族の平民に対する暴虐は言語を絶するものであった。このような状況の中で、イギリスやフランスでは、平民の勢力が中産階級の台頭と共に、古い権力を排斥して新国家を建設する方向性を示すようになった。

古典主義は大衆運動から遊離したが、思想的にはフランス革命の精神に反するものでなく、大きな政治と経済の社会問題をあくまでも客観的に把握し、美学的に表現しようとした。しかし、このような当時の社会革命思想に対する古典主義思想の後退的方向性は、唯一の窮余の逃げ道を意味していた。ロマン主義は古典主義の大衆運動からの離反に対抗して、フランス革命を背景として生まれた。ロマン主義が一般知識層と同じく、フランス革命に共感し共和主義を支持していたことは、ロマン主義の思想上の出発点が、古典主義から啓蒙主義につながるイギリスの偉大な伝統にあったことを示している。そして、その後の社会的混乱と矛盾を引き起こしたフランス革命と産業革命に対

して独自の反動の思想として確立したロマン主義は、ヘレニズムやヘブライニズムといった西洋思想の源流と深く結び付き、幅広い多様性と強烈な個性を特徴とするに至った。

ルイ16世処刑に至ったフランス革命に対してヨーロッパの知識層は動揺と当惑を禁じ得なかった。イギリスの代表的なロマン主義詩人で思想家であったコールリッジは、啓蒙思想の影響下で1789年から1799年にかけて起こったフランス革命による戦乱や18世紀末から発生した産業革命による近代化の時代精神に伴う社会制度の変革と資本主義の台頭の中で、両革命の理想と現実の矛盾と幻滅的結末や非人間的要素を批判し、人間社会の組織に与える影響を深刻に考察していた。フランス革命に心酔した初期のジャコバン的急進主義から反動的保守主義へのコールリッジの変遷は、彼のロマン主義思想の必然的移行であって原理的帰結であった。フランス革命や産業革命を支えた啓蒙思想や近代化の時代精神に対する彼の批判哲学に注目しながら、彼のロマン主義思想の先験的な性格を念頭に置きつつ、革命の歴史的衝撃と政治と経済の社会的動乱の中における、彼の思想の特徴と意義を考察する必要がある。

コールリッジのロマン主義は啓蒙思想や古典主義への批判によって、文学や社会に対する独自の思想を展開した。合理的機械主義や形式主義が支配して、ロマン的要素が死滅すれば、自然への驚異の念もまた死滅し、人間は日常的事実の悟性的理解のみに終始して、自然の神秘を完全に忘れ去るのである。驚異の念は詩的で熱狂的なものであり、芸術至上主義を支持するロマン主義の精神を形成する。感覚的外界を精神的な全体の相において眺めようとするコールリッジのロマン主義の態度は、北欧特有の思想を源泉とし、ギリシアやローマの思想を始めとするイタリア文芸復興を基盤としながら、自然界を霊的存在とする新プラトン主義の思想を導入したものである。彼は革命の実現を自己の問題として考察しなければならなかったものであり、自然の神秘に対する驚異の念の思想は、革命の幻滅的進行という事実の中で築かれたのであり、当時の時代精神への反抗とも言えた。

コールリッジのロマン主義は詩的想像力の絶対

的自由を高唱し、詩人の自由を保証する主客合一の独自の理念を構築したのであり、主観は単に既存の現実を認識し形成するものにすぎないと限定した古典主義の理論と対立するものとなった。

この様に当時の時代精神に敏感に反応し、生涯を通じて体系的な思想構築を模索し続けたコールリッジのロマン主義の特質は、様々な思想的変遷の過程の中で形成されたものであった。彼の思想形成過程を展望すれば、フランス革命の幻滅的進行とともにジャコパン的急進主義を修正する1796年頃の政治的变化、ワーズワスとの共著『抒情民謡詩集』によるイギリス・ロマン主義の宣言であった1798年の詩的創作の隆盛の時期、また、イギリス経験論哲学から移行してドイツ観念論哲学の研究に没頭するに至った1800年以降の哲学的批評家としての思想構築の時期、さらに、ユニテリアニズムから伝統的カソリックの三位一体説へと変化した1805年の宗教的転向の時期、この様な政治、文学、哲学、宗教における激しい思想的変遷の約十年間が、コールリッジのロマン主義思想の発生と展開を凝縮して示している。フランス革命に心酔した時期のコールリッジ思想の傾向と、革命の幻滅的進行以後の彼の深刻な反応は、彼のロマン主義の発生の前提でもあり、この初期のジャコパン的急進主義との関連を検討する必要がある。イギリス・ロマン主義に大きな影響を及ぼしたルソー思想やフランス革命は、ジャコパン的急進主義の人間観や世界観の革命理論となって初期のコールリッジにも密接な関係をもたらした。若き日のワーズワスが熱心な共和主義者となって革命の理想に心酔したのと同じく、コールリッジもフランス革命と絶対自由の理想を称賛し、新世界が構築されることを希望していた。

(2)

フランス革命以前のコールリッジは啓蒙思想による政治的改革への傾倒によって、ジャコパン的急進主義者であった。この初期のコールリッジの政治的改革論は合理主義的啓蒙思想の世界観の立場に基づくものであり、社会の多様な悪弊を環境論で解決しようとし、抽象的理性の絶対性を主張

する楽観主義的啓蒙思想であった。フランス革命の失敗を眼前にして以降、彼は啓蒙思想の冷徹な知的分析による合理主義や無神論的傾向に激しく反発し、彼は有神論的体系としての自然宇宙への形而上的認識へと強く惹かれていくことになった。政治思想の中に宗教的信仰を不可欠の重要な要素と考えるコールリッジの思想は、経験主義哲学や啓蒙思想の政治理論そして合理主義的功利に基づく商業主義に対する批判的立場から出発したものであった。

フランス革命の勃発は当時の一般大衆を熱狂させ、コールリッジもジャコパン的急進主義の理論的徹底性を大いに称賛し、共和主義者となったことがあった。人間の精神的能力の新たな進展が、思想の構築に未知の領域をあたえるという彼の信念は、革命の必然性への理論的認識や人間の豊かな活力への素朴で楽観的な信頼を生んだ。しかし、現実の革命の成り行きに愕然としたコールリッジは、ジャコパン的急進主義の行きすぎを批判し、その無軌道ぶりを非難した。当時の動乱の時代精神は絶対的自由主義か絶対的王権の専制主義かの二者択一を要求し、中途半端で無意味な妥協は許されないという過激で熱狂的なものであった。妥協の産物としての不完全な自由は専制主義に取って代わられる危険なものとされ、穩健を装う巧妙な欺瞞は王党派よりも悪質で、絶対的自由主義による理想実現にとっては排除すべきものとされた。このような社会状況は、古典主義に対するロマン主義の反抗の発端ともなり、さらに大きく反動化したロマン主義の本質を如実に示すものである。

その後のフランス革命の幻滅的進行に対する失望によって、無制限の自由の主張は社会体制の崩壊を招来することをコールリッジは痛切に反省した。この反省から暴力的革命によらない有徳の思想と節度ある自由主義との合一に基づく改革の可能性を彼は模索したのである。有徳の思想と節度ある自由主義による社会の実現は穩健な改革によってのみ可能であった。

18世紀後半の作家や思想家たちが、当時の社会的条件の中でヨーロッパの革新思想を受容し継承しようとしたことは驚くべき歴史的事実であった。しかし、啓蒙思想に基づく革命思想が、封建

的社會を激しく揺さぶることになり、思想がフランス革命に現実化され、議会在王權の停止と選挙による議会の召集を決定し、ジロンド党がジャコバン党によって凌駕され、無軌道な恐怖政治がはじまったとき、ドイツのゲーテやシラーも、イギリスのコールリッジやワーズワスも、動揺と落胆を隠しきれなかった。この時、コールリッジは有徳の人間教育による善良なる市民階級の育成を重要な社会的課題と考えた。

コールリッジが節度ある自由主義に基づく社会の実現という理想を掲げながらも、暴力的なフランス革命の現実を非難せざるを得なかったことは、彼のロマン主義の思想的確立を模索する上で大きな動因となった。この様に、フランス革命の理想の衝撃的影響は、宗教的ユニテリアニズムやジャコバンの急進主義の政治思想へと若き日の彼を駆り立てたが、暴力革命に対する失意によって、その後、フランスの革命主義とイギリスの現実主義の和合による社会体制を模索することになったのである。

コールリッジはフランス革命に対する失望から、現実の革命の進展と改革の理想の相克に直面して、暴力による現実の革命を否定し理想としての革命の理念に詩人的共感を示すという矛盾した革命観を自己分裂的に抱き、その相克と和解に苦心するのである。さらに、フランス革命軍が対イギリス戦争へと突き進み、ヨーロッパ全土への侵略軍に変貌するに至って、コールリッジの革命観は根本的に変化することになった。フランス革命は理想としては正しいが、現実の革命指導者の暴走がフランスを対イギリス戦争や国内の恐怖政治へと駆り立てたとコールリッジは考えた。フランス革命の理想と現実の矛盾と幻滅、イギリスの対フランス戦争への非難、ピットの専制主義体制への批判等に、コールリッジのジャコバンの急進主義から反動的保守への展開が示されている。農業を破滅し農村を破壊した商業主義や資本主義をもたらした産業革命の否定、諸悪の根源である利己心と不平等に基づく私有財産制と都市型価値観への批判を強めて、暴力革命でない教育による有徳の市民階級の育成による改革という理念を彼は模索した。理想としての革命への共感は、現実の革命への不

信と矛盾をコールリッジの心に植え付け、このような相反する要素の調和と融合による新たな理念への思索は、その後の彼の思想構築上の重大な問題となった。

このような革命の矛盾が生む理想と現実の分裂によって決定的な破綻には至らなかった初期のコールリッジは、合理主義的啓蒙思想を基盤とする機械主義的な観念連合哲学の人間観や世界観を信奉していた。しかしフランス革命の理想に陶醉しながらも、革命が暴徒化した大衆の流血と暴力によって実現されるとは若き日の彼も考えなかった。人間は社会環境によって育成され、環境は人間によって変化する。したがって、先覚者でも先導者でもない無知な一般大衆が環境を適切に変えうるのかという根本的問題を、後年コールリッジは大衆を指導する少数のエリート政治集団を中心とした社会体制によって解決しようとした。

ゴドウィンの急進主義哲学に傾倒していた初期のコールリッジは、世の全ての悪弊を認識上の誤謬の結果とし、周囲の環境の変化によって産出されたものであると考えていた。疫病のような人類の汚点として最悪のものが王制であり貴族制であると主張し、フランス革命に大いに期待し人類社会の改革の良き時代が到来しようとしていると信じて、彼はフランスが絶対自由の理想を実現することを願った。フランス革命は人類の旧来の悲惨な悪弊を取り除き、徳性と幸福を人類に取り戻す唯一の希望だと彼は賞賛した。1794年6月、サウジーとの出会いによってコールリッジの急進的な政治的関心は非常に強まったことが、人類に自由をもたらす共和主義体制の確立を願ったサウジー宛ての手紙にも示されているのである。

フランス革命の幻滅的進行に直面して、革命の理想による人間観や世界観から導き出された政治、哲学、宗教の思想を修正せざるを得なくなった彼は、フランス革命の理想に心酔しながらも、暴力革命の現実是否定せざるを得なかった。革命の指導者ロベスピエールの恐怖政治は、有徳の理性による社会構築の理念を見失い、冷徹な悟性的理解と権力欲の専制主義に他ならないと彼は非難した。革命の残忍な現実の進展に対する失意と当惑の中で、人間の不条理や革命の流血と権力欲の専制支

配に危機意識を募らせ、コールリッジは楽観主義的な人間観や世界観に疑問を抱くようになったのである。彼は一切平等団の計画の失敗やフランス革命の幻滅的進行への失望の後、自然世界に対する汎神論的瞑想の世界に没頭するようになり、ワーズワスとの出会いに至って詩人として1798年の驚異の年を迎え、充実した詩的想像力による創作隆盛の時期を得たのである。この様に、フランス革命の理想と現実の矛盾と苦悩の中で、コールリッジは自然宇宙の中に絶対的自由を見た。現実の革命では実現できなかった自由の精神は、汎神論的な自然観照の中で解放され、飛翔した詩的想像力に実現されたのである。革命の理想と現実に対する幻滅の失意と当惑は、一切平等団の計画の挫折や結婚の失敗という初期の苦い体験によって、コールリッジの内面世界に利己心や罪の問題を考えさせる契機ともなり彼の宗教性をいっそう深め、理想と現実や頭脳と感情の相克と和解という思想上の根本的課題を彼はより深く考察することになった。独裁者ロベスピエールやナポレオンを生んだフランス革命が理想とは正反対の現実を生み出し、自由の理念が瞑想的自然観照の中で人間の想像力にのみ実現されると考えるに至ったのは、革命の現実に対する彼の深刻な失意と不信の表明に他ならなかった。

フランス革命の理想の崩壊は、初期のコールリッジの急進主義の基盤となったハートリー哲学の否定をも意味しており、彼はさらに理想と現実の相克と和解の問題を解決すべく哲学遍歴へと駆り立てられることになった。フランス革命の失敗は、理想と現実の分裂を生んだ思想上の誤謬を明白に示すもので、絶対自由の理想による人間社会の改革の実現への望みを放棄し、利己的な享楽主義的に耽る人々に対して、新たな社会制度構築を示すための理念確立を模索して、コールリッジはドイツ観念論哲学へと思想的遍歴を深めることになったのである。哲学遍歴による苦心の思索を積み重ねた結果、彼は革命思想への批判と分析の原理としての認識哲学を構築するのであった。啓蒙主義の理論的体现であったフランス革命は、現実には恐怖政治とナポレオンの台頭を招いただけであった。フランス革命の失敗は、無知な一般大衆を扇

動し流血と暴力に訴えた結果だと考え、コールリッジは一般大衆の徳性の教育のための理念哲学を樹立し、当時の啓蒙思想一辺倒がもたらした政治的動乱や、商業主義や資本主義を無軌道に押し進める時代精神に向かって、急進主義への危慎の念を表明する必要に駆られたのである。ジャコバン主義によるフランス革命がもたらした恐怖政治の専制からナポレオン台頭の過程を眼前にしたコールリッジは、啓蒙主義に対する批判と分析の態度を強め、さらに、フランス革命後、急速に社会的矛盾を引き起こす原因となった産業革命の展開の中で、都市への人工の集中と農村の破壊、資本主義による貧富の格差の拡大などの様々な社会問題に対する思索を深めていくことになった。

フランス革命の失敗でロベスピエールとジャコバン党は没落し、フランスには革命の成果のうちの支配階級に有利なものだけが存続した。功利的な自由が商工業全体を支配し、資本主義は一切の制約から解放されて労働賃金による搾取を強め、やがてナポレオンの軍事的独裁の台頭を許し、ヨーロッパを大戦乱へと導く事になった。政治的、経済的動乱は精神的混乱を喚起し、快楽への陶醉が特権階級をとらえ、墮落した風俗が社会に蔓延した。舞踏に夢中になる退廃の社交界は腐敗に満ちたが、少数の特権階級は欲望を欲しいままにしていた。ロマン主義はこの様な当時の社会的情勢の反動としての傾向が著しく、思想の本質に密接に結びついているのである。

(3)

飢えた貧民の困窮の声や救いを求める叫びを無視し、教養人を自認しながら何の道理も持たずに、貴族の横柄さで貧民の存在を無礼な連中と決めつけ、人間愛を口にしながらも、実際には冷たい態度を取る利己心に矛盾を感じない特権階級や貴族達にコールリッジは義憤の念に駆られた。彼は諸悪の根源としての貴族主義の廃絶のために改革への希望を募らせていた。一切平等団の計画が構想されたのも、この様な社会正義への高まりの中でのことであり、ゴドウィンの『政治的正義』に示された原理を実践しようという計画は、正義に

よる国家体制樹立へのプラトンの理念と共に、若き日のコールリッジを夢中にしていたのである。正義の哲学的思想を信奉する高潔な政治家たちが、大衆を教育することによって理想の国家の基礎を築こうとするものであった。救いがたい悪弊に満ちた近代国家を見限り、一切平等団を計画したコールリッジやサウジー達は、アメリカのサスケハナ川の岸辺に理想の共同体社会を構築することに唯一の希望を見出していた。高い教養を身につけ、絶対自由の理想に燃えた12組の若い男女がイギリスを出航し、アメリカの未開地で共同生活の住居を構え、自給自足の労働で得た農産物は共有財産として分け合い、大部分の時間を読書による研究と子供の教育に捧げ、男性も女性も同じく精神修養に努めねばならないというものであった。

非現実的な一切平等団の計画は挫折し中止となったが、現実感覚を喪失したコールリッジは、メアリー・エヴァンズを夢想のために犠牲にして、一切平等団のための花嫁との結婚の約束だけが残されたのである。一切平等団計画の熱狂的言動は、若気の過ちであり、その後のコールリッジの思想形成過程は、彼の精神的本質が何ら損なわれることなく着実な発展を遂げて前進し続けていたことを示している。当時の政治体制の不備を指摘し、万人平等を信奉する者として、政治理論を語るよりも福音書の教えを説くことが重要だとし、科学者の理論や啓蒙思想の急進主義の誤謬に対してキリストの教えが有効だと彼は考えた。さらに、傾倒していたゴドウィンの無神論的急進思想とコールリッジのジャコパンの急進主義との間にはキリスト教信仰という点で、決定的な相違点があったことも彼の不信の念を募らせる原因となった。したがって、ゴドウィン思想に対するコールリッジの態度の変化は、以前から彼が無神論的思想の欠陥に鋭く気づいていたことを示している。倫理的道義はゴドウィンの政治的正義にも示されているが、その抽象的な理論は不十分であり、現実の社会を捉えていないと彼は考えた。現実の社会からの個人の具体的感情が真の徳性によって育成されるべきであり、彼の中から徐々にゴドウィン思想が取り除かれ、人間愛、啓蒙主義、必然論、社会的悪弊と大衆の無知等の抽象的理論に終始する

思想は、特定の少数者にのみで議論されるもので、現実社会に苦しんでいる貧民や無知に貶められている一般大衆には、福音的教育を説くことによってのみ社会的救済がなされるとコールリッジは考えた。宗教的感情と哲学的思考を結合させて一般大衆の権利と義務を教示することが、社会的真理と救済の慈悲の精神を世の中に形成する最良の方法であると彼は主張した。冷徹な抽象的論理は大衆には無意味で何も訴えかけないのであり、唯一有効な社会救済の手段は宗教的教育のみによってなされると彼は確信する。

家族愛を否定しながら、個人が育成すべき家族愛に基づく人類愛を教化するという横柄なゴドウィンの哲学の虚偽をコールリッジは糾弾するに至った。ゴドウィン思想への傾倒から解放され、政治的正義の論理の矛盾に批判の眼を向けるようになると、家族愛を愚劣と非難し、結婚を不正義と断定する主張などは、到底受け入れがたい暴論で、真の思想家は全体の善が個人の善ともなることを信じるものだとは彼は考えるに至った。家族愛も結婚も認めないゴドウィンの思想原理は不道徳に満ちており、コールリッジは痛切な思いで劣悪な思想であることを指摘し、道義的にもその矛盾を糾弾することになった。精神の肉体への絶対的支配によって、人間が現世で不滅者となり、死さえもが意志の行為となると説くゴドウィン思想は不可能であり、その信憑性を疑い、彼は厳しく非難したのである。1797年2月のセルウォールに宛てた手紙の中で、ゴドウィンの思想を喜んで放棄すると彼は書いており、さらに、ワーズワスとの出会いでも、ゴドウィン思想への反感を共にすることによって両者の友情を深めることになった。

産業革命後の社会の激変は、搾取する資本家と貧困化する労働者、スラムの発生、人口の都市集中と農村破壊という新たな社会と経済の問題を発生させた。フランス革命当時の社会情勢は伝統的地主階級の利権とジャコパンの改革との対立であった。コールリッジのロマン主義の形成において、フランス革命や産業革命における人間の尊厳の破壊と社会構造の衝撃的激変は痛烈なもので、彼にとって両革命への理論的分析と批判は、重要な政治と経済の解決すべき問題であった。産業革命

の動乱の中での商業主義や資本主義による大衆への煽動や搾取は彼にフランス革命の失敗を想起させた。当時の社会状況の混乱と大衆の苦難の原因となった商業主義を批判し、フランス革命と同じ近代の時代精神の大きな誤りだと指摘した。コールリッジはフランス革命と産業革命による動乱の社会状況の中で、ロマン主義による近代への批判精神という新たな意識改革を確立しようとしたのである。

ジャコパン的急進主義は現実には政治的専制を生み出すもので、経験的悟性の世界に誤用された過激な抽象的理性が人々を扇動し、自由と民権という抽象的命題が人々を無謀な衝動へと駆りたてたとコールリッジは論じた。過去において歴史上、宗教改革や名誉革命の時代は宗教論争が盛んで、宗教は人の心に真に機能して、英知と徳性に満ちた人間の時代として、神と人間は無理なく調和していた。しかし、ロックの経験論哲学がイギリス社会の支配的原理として保守化した時代精神となつて、この神と人間の微妙な調和関係を破壊した。また、啓蒙思想の実現として期待したフランス革命の失敗は、急進主義の抽象的理性の矛盾と限界を露呈した。コールリッジのロマン主義はこの様な時代の動乱の中でフランス革命と産業革命に対する批判精神から生まれた。ジャコパン的急進主義の政治的専制からナポレオン台頭、対外侵略戦争というフランス革命の幻滅的進行の中に、コールリッジは権力欲、不完全で過激な抽象的理性、啓蒙思想の自由と民権の理論の非現実性を痛切に認識した。

革命の残忍な結末をもたらした抽象的理性への不信と宗教的原罪に対するコールリッジの意識の深まりは、ジャコパン的急進主義の無神論的傾向に対する決定的な離反となった。ジャコパン的急進主義の過激な抽象的理性が大衆を無軌道に扇動した結果の危険性を、彼はフランス革命の失敗から現実として痛切に認識した。産業革命をもたらした社会と経済の激変に対しては、過剰な功利主義が生んだ時代精神として、商業主義や資本主義の悪弊への批判となった。産業革命による商業主義と資本主義の台頭を支える合理主義的機械論の人間観が時代精神となつて社会を支配することの

危惧の念を彼は危機意識として捉えていた。コールリッジが啓蒙思想とフランス革命を時代精神の悪弊の両極端を示すものとして把握しているのは、彼の思索の特徴を示すものである。啓蒙思想による合理主義的機械論はあらゆるものを客観的にのみ捉えるもので、この様な急進主義の理論はフランス革命で頂点に達したが、その直後理想と現実の矛盾の中で崩壊する。要するに、コールリッジのロマン主義思想の発生はフランス革命への失望やナポレオン台頭によるイギリスの危機、産業革命による商業主義と資本主義がもたらした貧富の格差の拡大と社会の混乱、イギリス経験論哲学からドイツ観念論哲学への思想的遍歴などが主要な動因となっていた。ジャコパン的急進主義の抽象的理性は無神論と無政府主義へと現実無視の無謀な理論を展開し、その結果、革命は恐怖政治による専制主義の支配をもたらすことになり、ナポレオンはフランス革命の理想の実現を標榜したが、ヨーロッパ全土を混乱に陥れた覇権主義を生みだしただけであった。

ヨーロッパ全土にロマン主義が勃興した1800年前後の文学や思想を検討し、前世紀の思想と比較考察をすることによって、啓蒙思想や古典主義との関連と相違点が明確になり、当時の時代精神の一般的傾向や個別的な影響関係を論考することで、ロマン主義の発生と思想的特質を把握することができる。歴史的に啓蒙思想は文芸復興を源泉とするもので、近代の時代精神として社会と文化の建設に大きな貢献を果たした。中世からの神中心のキリスト教思想の衰退と科学技術や知識の発達の結果、個性的で自由な生活の確立を求めた人間が、組織腐敗が進行していたローマ教会の指導や前世紀の価値観に反発して、啓蒙運動に新たな可能性を期待したのは自然の成り行きであった。宗教改革も産業革命の基盤である自然科学研究も、本来同一の精神を源泉とするもので、イギリスやフランスにおいて独自の発達を遂げて、スコラ的思想にも人間理性の力を重視する啓蒙思想の傾向が浸透していたのであり、合理主義が哲学の体系を得たものが啓蒙思想と言える。

現実的で功利的な傾向を持つイギリスでは、啓蒙思想の合理主義は経験論哲学と結びついて他

の国よりも発達した。さらに産業革命以降の新興勢力としての市民階級の発達も他よりも顕著であり、啓蒙思想の定着に貢献した。したがって、イギリスの啓蒙思想はヨーロッパ諸国に大きな影響を与えて、18世紀のヨーロッパの思想形成の発生源となった。コールリッジは生来、独自の宗教的神秘意識を持っていたため、啓蒙思想の受容は複雑な様相を呈し、啓蒙思想は彼のロマン主義の背景となると同時に、さらに彼が対立すべき時代精神となったのである。啓蒙思想の本質的特徴は悟性を中心とした知的判断を古代の書物や教会組織、権力者に求めるのではなく、自分自身の責任で自由な独立した人間となる英知を持てば、不充分で未発達の状態を解消して、自分の知的判断が悟性中心の啓蒙の精神の本質に迫ることができるというものである。神や教会はもとより自我以外の全ての権力を否定し、自分自身の判断の基盤として抽象的理性を知性の最高位に置き、啓蒙思想は明確な認識による合理主義の普遍的哲学の樹立を求めるものであった。合理主義の啓蒙思想は普遍的原理として抽象的理性を掲げて、科学技術と芸術学問、道德律と宗教、国家と法律、社会と経済、教育などのすべてを時代精神として支配し、世界と自我を悟性の体系によって説明する理論の構築を考察していた。

(4)

啓蒙思想は非合理的なもの、偶然的なもの、曖昧なものを排除して、不変の抽象的理性の理論構築のために、歴史的事実や伝統観の意義を疑い無視しようとした。したがって、特殊な事柄や個別的事象を否定して、抽象的理性の必然性のみを強調し、現実から遊離した過激な理論を生んだ。本来個性尊重の精神で育成された啓蒙思想は、抽象的理性の過剰な支配に偏って、個性尊重の価値観を喪失し、現実社会を無視した単なる理論の必然的法則による機械的結合に走り、生命的理念は消滅し、形骸化した不毛の理論の現実離れた理想や完全性のみが絶対視された。悟性のみを信奉する啓蒙思想の合理主義は、精神世界に不可欠な感情や人間の意味決定に密接な個性の複雑な相互

関係を無視した。芸術的創造力や詩的想像力の領域は不合理な妄想として退けられ、啓蒙思想は人間精神の多様な世界の生命的事実を否定し、自然界から受けるべき清新な感動や衝動を認識する能力を消滅させるに至った。合理主義によって抽象的理性が悟性によって支配され同化した認識の世界を重視したため、現実の人生と自然の複雑な諸相や感動を生み出す活力は忘れられて、荒涼たる世界は冷徹な機械的原理による不毛の論理に支配されるものとなった。さらに、道德は形式的で些末な規則だけを説く軽薄な教訓主義に終始し、文学芸術や哲学も、抽象的理性の絶対的支配下で世俗的利益のための手段となった。

このような急進主義の悪弊に注目して、啓蒙思想への批判をコールリッジは露骨に表明し、中世的神中心の社会を調和的統一の具現として讃美し、宗教改革とフランス革命を破滅的兆候と非難して、ロマン主義のカトリックへの改宗を説いたのである。しかし、コールリッジは封建的絶対主義への復帰を意図したわけではなく、君主制と共和制が必然的に密接に結びつけられる有識者の集団の指導による社会体制を待望し、絶対的専制主義に対する暴力革命なしで、徳性を伴った適正な資本主義経済への移行を求めているのであり、資本主義を否定して古代社会の秩序を復活しようと考えたわけではない。

コールリッジはジャコバン急進主義に基づく啓蒙主義の悪弊や功利主義の機械的合理論の支配に対して、この近代の時代精神の欠陥を直観的に把握して痛烈に批判した。革命の動乱の社会状況の中で、当初、彼は急進主義の悪弊は真理認識における誤謬によるもので、社会制度や教育による環境の改善によって矯正しようと考えたが、後年、創造的意識の自由な解放と能産的自然への復帰の必要性を強調した。このような教育による環境論と啓蒙主義批判の立場から、偏狭で自己中心的な功利主義や、貧民を顧みない商業主義、搾取を合理化する資本主義などを彼は攻撃した。恐怖政治の専制、熱狂的な大衆への扇動、利己的な合理主義に対抗すべく、コールリッジは社会批判のための普遍的原理の確立を訴え、国家を構成する諸勢力の調和的均衡は、主権在民と言論の自由のもと

づくべきだと彼は主張した。この理念に基づく社会改革の中心的役割を少数の知的エリートによる集団的指導体制に彼は求めた。無神論は劣悪な環境と教育の欠如による人間の無知と不見識から生じる。功利主義は産業革命後の商業主義や資本主義によって拡大された。全体的功利を啓蒙主義教育によって人々に自覚させ、無限の人間完成を信じさせ、信仰や道徳の感覚さえも、すべての事象を客観的合理の過程とみなすのが啓蒙思想であり経験主義である。コールリッジはこの様な思想の限界を敏感に読みとっていた。イギリス経験論哲学の基礎はロックによって築かれ、ヒュームを経てハートリーの観念連合哲学によって完成された。初期の彼はこのハートリーの観念連合に傾倒していたが、啓蒙思想への反発と共にこの連合説からも離反するに至った。

ハートリーによれば、人間の認識作用は感覚的悟性の連想によって、単純観念からさらに複合観念へと展開して機能するものである。印象や記憶の因果関係や思考に対して、観念連合の法則が時空間において働くことによって、悟性による感覚的素材が結合する。ハートリーの哲学はこの観念連合の法則を生理学的合理主義や機械主義で説明するもので、感覚的素材は心理の中で持続して集積され観念となり、さらに観念連合の法則の下に集合して、複合的観念としての思想を生み出すのである。この観念連合の学説はきわめて機械的合理に基づく経験主義哲学であり、その論理は一定の生理学的合理主義の法則の下で機能するものである。ハートリーの世界観では完全無欠の不変の法則による合理主義的宇宙があり、原則的に悪の存在さえ認められない。これに対して、利己的な功利や合理の社会から脱却して、全体的な徳性の社会を創造する手段として、コールリッジは宗教的教育を有効だと考えた。すなわち、教育による社会と自然の両面の環境改善を計り、社会の全体的利益は宗教的徳性によって自覚され維持されるのである。コールリッジは理性的主体性を見出すことのできない無知な一般大衆に訴えて扇動するのではなく、むしろ貧困と無知に苦しむ彼らのために訴え、私利私欲の悪弊の根源である功利主義や資本主義による貧富の格差の拡大をもたらす私

有財産制を廃止することで独自の社会改革を実現しようとした。自然環境と人間を改善する発展的で生成的な生命的原理を模索したコールリッジは、独自のロマン主義思想を構築することになったのである。

人間の物質的で利己的な欲望を原理として最大多数の最大幸福を唱えるベンサム功利主義を批判したコールリッジは、私利私欲の功利主義から全体的功利主義への移行を抽象的理性と冷徹な知的道徳律に頼るゴドウィンの無神論的啓蒙思想も否定した。彼は私利私欲の功利主義の否定と全体的善への指針として真の理性による理念の教育、また貧富の格差を助長する私有財産制の悪弊は正のみならず、さらに宗教的信仰と人類愛の必要性を高唱したのである。

ハートリーに傾倒した頃のコールリッジは、ゴドウィンの無神論的急進主義を批判しながら、人間の抽象的理性の全能と楽観的合理主義を信奉していた。しかし、フランス革命以後、あらゆる社会の悪弊の原因となって、自然と人間の調和的環境を破壊し、無知な一般大衆を扇動し搾取する急進主義的啓蒙思想の合理主義的世界観に彼は疑問を抱くようになった。コールリッジは革命の理想と現実とに直面し、非人間的な行為が繰り返されるのを見て、人間の本性に潜在する原罪に注目するようになり、以前のユニテリアニズムの宗教観から脱却して、正統的キリスト教を中心とした宗教的考察をさらに深めたのである。感覚的悟性のみを強調するハートリーの連想哲学に代表される啓蒙思想の時代においては、自然宇宙は合理主義的世界観、機械主義的経験論哲学、楽観的進歩主義や功利主義によって支配されるものとなり、壮大な理念や神秘的宇宙観は存在し得なくなった。啓蒙思想は外界での自我の自由解放を目指していたが、その感覚的悟性のみによる合理主義は壮大な理念の存在を否定していた。コールリッジはこれに対して内界での自我の自由解放を志向して、独自のロマン主義思想を構築した。感覚的悟性による功利主義経済を主張し、政治をたんに機械的に機能する合理主義で説明する楽観的啓蒙思想を否定して、彼は政治を壮大な理念として捉えようとしたのであった。

当時の時代精神に大きな影響を与えたフランス革命と産業革命は、キリストの誕生とゲルマン民族大移動、ルネッサンスと宗教改革に匹敵する歴史的大事件であった。人類が直面した二つの革命の経済と政治に対する幻滅的進行は、複雑で困難な問題を引き起こし、専制主義や資本家の搾取に対する隷従を欲しない有識者にとって注目すべき大事件であった。フランスの革命政府の指導体制は、専制主義か共和主義かの両極にのみ走り、中庸の君主制は単なる中途半端な妥協の産物として否定された。コールリッジは一般大衆を扇動するジャコバン主義の恐怖政治の独裁に深刻な危惧の念を覚えた。彼は市民や農民達の一般大衆に対しては知的論理や信念でなく、共感と寛容の精神をもって指導するべきだと説いた。長い間、無教育に放置され続けた一般大衆にとって、唯一の救済は徳性の宗教的教育であり、扇動によって熱狂した大衆が支配したり、指導者として命令し教示することの危険性を彼は力説した。真の改革は一般大衆の徳性の教育であり、狂気の大衆による専制支配よりも恐るべきものはないと彼は考えた。

コールリッジのロマン主義は当時の時代精神に対する反抗運動であり、啓蒙思想が排斥した歴史と伝統の価値観を再認識し、悟性的法則の画一的形式や人工的均整を破壊し、心情の自発的気運や精神世界の陰影に注目するものであった。彼は意識の薄明状態や自然界の未知の暗黒を探求し、冷徹な法則や明確な功利ではなく、広大にして無限なるものへの憧憬の念を抱き続けた。必然的原理や機械主義的法則の普遍性よりも、偶然的神秘性や個別的特殊性を尊重し、啓蒙思想に欠落していた人間性や自然宇宙の存在が、彼のロマン主義の本質を形成するに至った。

歴史的に明白なことは、古典主義とロマン主義の間に啓蒙思想が介在し、啓蒙思想の継承者で克服者でもあったカントの観念論哲学の思想界に対する偉大な影響が存在していることである。カント哲学がコールリッジのロマン主義思想に与えた影響は、古典主義や啓蒙思想との根本的相違を示す標識である。さらに、彼のロマン主義はキリスト教における個人的感情を基礎とし、正教的信条に反抗するベームのような個人的信条の必要を

説き、主知主義的把握よりも直接的な心情による神との直観的接点を探り、純粹精神の根源的直接性で宇宙の神秘への憧憬を抱き、神の生命へ接近する道を辿ろうする気概を示すものであった。コールリッジは合理主義に対して無意識的に反対し、あらゆる抽象的理性の功利や機械的支配を否定した。彼はソクラテスやヒュームのような懐疑主義者でもあり、啓蒙思想が全能とした抽象的理性の無能を危惧し、自然宇宙の神秘を解明する鍵を抽象的理性以外に求め、抽象的理性の信頼するに足りないことを終生主張し続けた。彼のカントとの出会いは、この傾向を決定的にした。カントも啓蒙的形而上学に疑念を抱いて懐疑思想に接近していた。しかし、カントは経験主義的懐疑思想から新形而上学の構築に向うが、コールリッジは理想主義的要求を捨てることなく、抽象的理性の合理万能への懐疑を持ち続けたため、彼の精神生活に大きな苦悩をもたらすことになった。

初期のコールリッジは最初全く違った精神状態で、自らが理性に目覚めた人間であるとの自覚から出発し、フランス革命の動乱に対して啓蒙的改革思想に同調したが、その後の革命の理想の幻滅的結末によって、抽象的理性の過激な変革に疑念を抱き、真の理性の存在を探究し模索するロマン主義的改革者となり、同時に合理的科学思想万能に対して批判を続けるロマン主義的批評家となった。この様に、ロマン主義に哲学的基盤をあたえたコールリッジの思想は、19世紀イギリス社会の確立にとって重要なものであった。

参考文献

The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge
(London and Princeton, 1969-).

Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge, ed. by
Earl Leslie Griggs, 6 vols. (Oxford, 1956-69).

The Complete Poetical Works of Samuel Taylor Coleridge,
ed. by E. H. Coleridge, 2 vols. (Oxford, 1912).